

# ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.6 2011.7.16

安曇野・昭和の子どもたち～戦争から平和へ～



「卒業も近いある日教室の窓より(高家小学校・昭和24年)」(個人蔵)

昭和という時代は世界的な大恐慌から始まり、日中戦争、太平洋戦争、その敗戦後の復興、高度経済成長という大きなうねりがありました。その波は当然安曇野にも押し寄せ、否応なく人々の暮らしのみこんでいきました。

戦時下、安曇野には「小国民」と呼ばれ軍国主義教育を受けた子どもたちがいました。空襲を避けて東京などの都市部から疎開してきた子どもや、満蒙開拓青少年義勇軍として満州(現在の中華人民共和国東北部)へ送り出された子どもがいました。

押し寄せる時代の波のなかで、子どもたちはどのように学び、遊び、そして暮らしていたのでしょうか。

上の写真は昭和25年(1950)春、卒業を間近に控えた高家小学校六年生の子どもたちです。昭和19年4月に高家国民学校に入学したこの学年は入学記念の写真もなかったそうです。しかし、柔らかな春の日差しを受けて子どもたちの表情はなんと輝いていることでしょうか。この子どもたちがどんな未来を胸に描いていたのか想像してみてください。

●今回お話を伺った方々

熊倉歴史・文化研究委員会のみなさん・14名 (昭和2～17年生・豊科)、T.Yさん(昭和8年生・穂高)、J.Mさん(昭和9年生・豊科)、Y.Yさん(昭和9年生・堀金)、K.Mさん(昭和11年生・豊科)、C.Tさん(昭和10年生・豊科)

◆◆尋常小学校の子どもたち◆◆

昭和の始まり 安曇野では明治末から大正初めにかけて、自由な思想に基づく教育が芽生えました。生徒一人一人と真摯に向き合ったその教育は、影響を受けた文学雑誌『白樺』から名をとって「白樺教育」と呼ばれました。現在では高く評価されるその教育も当時は批判にさらされ、迫害・排斥されました。さらに昭和になると大正期の自由な気風の教育から一転し、軍国主義思想が学校教育を覆いました。

社会的にも昭和4年(1929)、アメリカに端を発した経済恐慌が価値の大暴落を引き起こし、養蚕業の盛んだった安曇野の人びとの暮らしに暗い影を落とします。

さらに、昭和6年(1931)には満州事変が起こり、「十五年戦争」呼ばれる中国との長い戦争が始まりました。

しかし、高家尋常小学校に通ったK.Mさん(昭和2年生・豊科)は昭和12年(1937)に豊科出身の飯沼正明飛行士が東京-ロンドン間飛行の当時の世界記録を樹立した際のことを「旗行列つってね。結構平和な感じがした」と振り返ります。



れんげ畑 昭和6年ころ(個人蔵)



豊科公園開園記念のアルバムより(豊科公園は皇太子誕生の記念として昭和10年に造られました。子どもたちの服装が華やかです。)(当館蔵)

コラム① 絵本『南安曇郡高家村』

『南安曇郡高家村』(1992)は著者の上野博子さんが高家村(現安曇野市豊科高家)で小学校二～五年生(昭和14～18年)を過ごした時のことを思い出して描いた絵本です。当時、米作りが中心の農村だった高家村の季節の移り変わりや、子どもたちのさまざまな遊びや楽しみ、学校や暮らしの様子、小学生の目に映った太平洋戦争のことなどが子ども向けに分かりやすく描かれています。「…安曇野に木枯らしが吹いて冬がやってきました。真っ白になった日本アルプスのむこうから広い野を吹いてくるそれは、飯田の町を吹き過ぎていったのとちがって、突きさすように烈しくけもの叫ぶような風でした。…学校ではお昼に温かい味噌汁を煮てくれるようになりました。生徒が組ごとに当番で味噌と野菜を家から持ち寄ったものです。『南安曇郡高家村』からは、戦争の影は感じつつも当時の子どもたちの、子どもらしい屈託のない様子が伝わってきます。



◆◆銃後の暮らし～戦時下の子どもたち～◆◆

子どもたちの衣服 昭和16年(1941)に「国民学校令」が制定されると小学校は「国民学校」となりました。国民学校の教育の基本方針は「皇国民の基礎的練成」とされ、天皇を中心とする国家へ忠誠を尽くすことが何より大切なことだという軍国主義教育の色がいつそう濃くなります。男子児童の服装は国民服、女子児童はモンペを着用し、胸には氏名の入った名札を付けるように改められました。



小学生の国民服(当館蔵)

「学校に行く時は詰襟だった。モス(モスリン・羊毛の平織)という綿っぽいような生地だった。帽子もあった。町屋の子どもは半ズボンで来ていた子もいた。着物の子はいなかった。靴はかろうじて今の運動靴のようなもので、底は生ゴムでべったんこ。小学校三年生からは寒中でも学校へ靴を履いて来ると言われた。草履か下駄を履いて行った。靴はどんどん無くなっていった。ましてや兄弟が何人もいれば一年生の子どもに裸足で行けというわけにいかないの下へ下へと(お下がりで)いった。寒中には雪のなか足袋履いて、藁草履履かか、下駄履かかだった。そういう時は学校の近くの友達の家までは靴で行って、そこで草履に履き替えて学校へ行った」T.Yさん(昭和8年生・穂高)。物資が不足し、配給制度が始まると、衣服や靴などは配給制になりました。靴はクラスに2足ほどしか配給されないの、遠くから通う子どもから順にくじを引いて決めたそうです。



昭和19年の穂高国民学校入学式(個人蔵)

防空訓練と穂高への爆撃 学校では空襲に備えて防空訓練をしたり、体練科(体育)では軍隊式の訓練も行われました。

「うちに帰る時に爆弾が落ちたらよけるように訓練もした。先生が笛を吹くと、壕の中や田んぼの土手で、目と耳を押さえて下を向くように訓練をさせられた。この辺は空襲はなくて実際にやることはなかったが」T.Sさん(昭和11年生・豊科)「お宮の松の木のところでお腹這いになって目や耳を押さえて訓練した」I.Mさん(昭和11年生・豊科)

昭和20年5月19日にはB29爆撃機による穂高と有明への爆撃がありました。その時のことを穂高国民学校に通っていたT.Yさん(昭和8年生・穂高)は覚えています。

「爆弾が落ちるのが3秒遅かったら私は死んでいた。爆弾は学校からの距離150mほどのところ

に落ちた。校舎やグラウンドに落ちたら死んでいたが誰も死ななかった」

この時投下された爆弾は250キロ爆弾で、穂高国民学校南方の畑へ5発(うち1発は不発)、有明の田んぼへ12発投下され、死者2名・重軽傷者数名がありました。

学童勤労奉仕 昭和16～20年度の豊科国民青年学校『学校日誌』によれば終戦が近づくにつれ勤労奉仕や、学有林の手入れ、ワラビなどの食糧や薬草採集を行ったという事項が増えています。

勤労奉仕には、工場の欠員補充(高等科以上)、近隣の農作業の手伝いなどがありました。農作業の手伝いは大豆の種まきや、「蛾とり」といった稲の害虫駆除、麦踏みなどさまざまで、子どもたちは「校外学習」と言っていたようです。



南穂高重柳村での勤労奉仕 昭和10年代後半(当館蔵)

高家国民学校で農作業の手伝いをしたというM.Mさん(昭和11年生・豊科)は、「校外学習って行ってやらされた。地区ごとに集まって1グループでこの田んぼへ行くと田んぼへ行かされた。4月には麦踏みもやった。ヒバリの声を聞きながら4人くらい列になってやる。そうすると面白くて終わっちゃう」と振り返ります。低学年の子どもにとっては、学校で勉強するよりも外での作業は遊びの延長だったのかもしれませんが、しかし、その背景には召集によって働き手を失った農家の経営難を助け、少しでも食糧不足を解消するという目的がありました。



豊科尋常小学校学有林植林 昭和15年(当館蔵)

**学童の集団疎開** 太平洋戦争の戦局の悪化にともない昭和19年6月に都市部の学童疎開の促進が閣議決定されました。対象は国民学校初等科三年～六年(現在の小学三年～六年生)で縁故を頼って疎開できない児童は「集団疎開」をしました。

安曇野では昭和20年4月から、長野市や松本市浅間などに疎開していた子どもたちを「再疎開」として受け入れました。穂高・豊科・三郷は世田谷区太子堂国民学校約500名と足立区千住第三国民学校265名を受入れ、堀金は世田谷区塚戸国民学校115名、明科は豊島区池袋第七国民学校70名、足立区梅島国民学校数十名の児童をそれぞれ受入ました。集団疎開の子どもたちの宿舎(学寮)になったのは集会所やお寺などが主で、設備も整わない中、疎開児童も先生も苦労したようです。

高家国民学校では太子堂国民学校の男子児童が転入しました。宿舎は飯田公民館(集会所)に24～5名、真々部公民館(集会所)に30名ほどで登校日数は282日でした。

集団疎開児童を同級生として迎えた I.M さん(昭和11年生・豊科)は「(疎開児童は)町の集会所に寝泊まりしていて、やっぱり都会の人で勉強は出来た。水泳なんかも早くてね。俺たちは56人のクラスだけど、そこへ集団疎開の子どもが10人入った。でも衛生状態が悪くて虱がすごかった。戦後みたいに DDT (アメリカによって持ち込まれた殺虫剤) もないし、薬もないし、飯田の集会所では味噌を炊く大がまで肌着をぐつぐつ煮ていた」と振り返ります。同じ組だった M.M さん(昭和11年生・豊科)も「疎開児童だからといってわけ隔てはしなかった。一緒にいたずらもした」と言います。

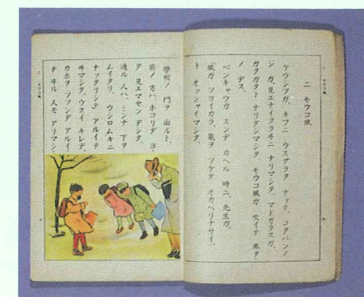
集団疎開した子どもたちが東京へ帰ったのは終戦後、昭和20年11月でした。

豊科国民青年学校『学校日誌』には「十一月八日木曜 午後三時五十三分豊科驛発ニテ疎開学童出発 初六児童代表シテ見送りヲナス」と簡潔に記されています。

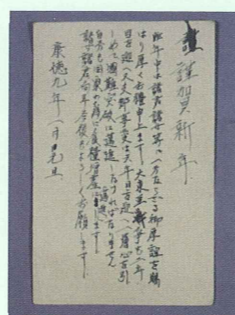
## コラム② 満州に送り出された子どもたち

安曇野からも「満蒙開拓青少年義勇軍」として、多くの子どもたちが満州へと送り出されました。「16歳(早生まれでは15歳)から19歳の健康で意思の強い」青少年が募集され、昭和13年には南安曇郡から40名が、明科を含む東筑摩郡からは164名の青少年が満州へ旅立ちました。この頃の農家は藪俣の低迷もあり収入が減っており、県から義勇軍選出の割り当てを課された教師たちも働き口のない農家の二男、三男を、大陸の新天地へ送り出すことが良いことであると考えざるを得なかったのかもしれない。義勇軍に参加した子どもたちは故郷を出てから満州に渡るまで茨城県の内陸訓練所で開拓のための基礎的な訓練を受け、満州に渡ってからも3年間は農業の実践訓練や軍事訓練を受けました。

この義勇軍は終戦に近づくほど低年齢の子どもが送り出されるようになり、昭和19年3月に送出された中には14歳の少年も数多く



満州で使われていた小学校二年生の教科書『まんしゅう』  
(安曇野市教育会蔵)



「昨年中は諸君諸女等に一方ならざる御厚誼を賜はり厚くお禮申し上げます。大東亜戦争も二年目を迎へ支那事変は六年目を迎へ一層心を引きしめて、國難突破に邁進しなければなりません。自分も國家の為に食糧増産に邁進します。諸女諸君、向年今後もよろしく願います。康德九年一月元旦」  
(安曇野市教育会蔵)

康德九年は満州国の年号で昭和17年にあたります。満州牡丹江省東京城義勇隊寧安訓練所(現中国黒竜江省寧安市)から豊科国民学校高等科宛てのこの年賀状は昭和16年、安曇野から満州へ旅立った15歳の少年が送ったものです。年賀状の表書きには検閲の印が押されています。

**子どもたちの食糧事情①学有田** 高家国民学校には「洗心田」という学有田がありました。昭和19年6月に大東亜戦争記念として開田されたこの学有田(7反5畝、現在のたつみ原)のことを覚えている方も大勢います。昭和18年に高家国民学校に入学した T.S さん(昭和11年生・豊科)は「小学校に入ったばかりのころ、(洗心田を)開墾に行ったことを覚えている」と言います。「洗心田」では収穫祭も行われ、収穫された米はお弁当を持ってこられない生徒の昼食になったそうです。



高家国民学校の「洗心田」太平洋戦争中か(個人蔵)

**子どもたちの食糧事情②お弁当** 安曇野は米農家が多く戦時下に都市部で食糧不足に悩まされた時も「米だけはあった」といいます。しかし、都市部から集団疎開をしていた子どもたちは学校に弁当を持ってこることが出来ませんでした。昭和20年に高家国民学校に入学した M.S さん(昭和13年生・豊科)は同じ組の疎開児童の子どもが、お弁当がなくて泣いていたことを覚えています。担任の先生に「お弁当を持っている子は、持っていない子に半分分けるように」と言われ、お弁当を半分ずつにして食べたそうです。



アルマイトのお弁当箱(安曇野市教育委員会蔵)

また、お弁当の米にはコーリャン(高粱・モロコシ。雑穀として米に混ぜて炊くと赤いご飯になる)を混ぜたこともあったといいます。特に集団疎開の子どもたちはコーリャンの割合の多い真っ

赤なお弁当だったそうです。そのため、地元の子どもの必要がなくてもコーリャンを混ぜたお弁当を持っていったようです。

お弁当のおかずは味噌で漬けた漬物、イナゴ・田鯉の煮付けのほか、高級品の蚕の蛹が入っていたこともあったそうです。アルマイトの箱に詰められたお弁当は、冬には教室の火鉢の上に金属の箱を置き、その中に並べて温めて食べたそうです。お弁当が温まると教室中にいい匂いがしてお腹が空いたということです。

## コラム③ 学校給食の歴史

安曇野での「給食」の起源は温明小学校で昭和8～9年に栄養不足の児童を対象に実施された牛乳とゆで卵の給食や、昭和10年前後から各校で始まった冬の「味噌汁」給食でしょうか。しかし、味噌汁給食は太平洋戦争が始まり、食糧が不足したことから中止されてしまいました。

終戦後の昭和21年、食糧不足は依然として続いていましたが、堀金や明科の小学校では子どもたちのために味噌汁給食が再開されました。味噌汁に入れる野菜などは、子どもたちが家庭から持参していました。その後ミルク(脱脂粉乳)給食を経て、昭和27年には小倉小学校で完全給食を実施、5年後の昭和32年までには安曇野の小学校はすべて給食を実施するようになりました。



「軌道にのった学校給食」昭和33年  
(安曇野市立穂高南小学校蔵)

月日	曜	献立表		
3.1	月	パン	ミルクココア	マーガリン、粉ふき芋、スパゲティのミートソース
3.2	火	パン	ミルク	あんこ、華風あえ、ハンバーグ
3.3	水	パン		さんま汁、ピーナツクリーム、サラダ
3.5	金	パン	ミルク	白菜のお浸し、肉だんごのあんかけ
3.6	土	パン	ミルク	マッシュポテト、もやしの油いため

昭和40年3月の豊科給食センターの献立  
(豊科町学校給食センターのパンフレットより)

## ◆◆子どもの遊び◆◆

戦争ごっこや食糧調達のための遊び 「遊び」ほど子どもたちの身体や知恵を発達させるものはないかもしれません。しかし、戦時下の子どもたちにとっては「遊ぶ」ことさえ自分の楽しむためのものではなかったようです。特に男の子の遊びは戦争を模したのものや、食糧不足を補うための食糧調達を兼ねたものが多かったようです。T.Yさん(昭和8年生・穂高)は「銃後の守りを固める小国民と呼ばれ、戦争意識の高揚やお国の役に立つ人になれ」という意識が強かった。男はとにかく戦争に行き戦地で死ぬものだと思った。ただ、私たちは田舎の百姓だったから陸軍という意識しかなかったけど、近所に召集された人で格好いい水兵帽をかぶっている人がいた。見たこともない真っ白な服で海軍はすごいと思った。それから飛行機。それが予科練や特攻隊に結びついていった。男の子にとっては「憧れだった」といいます。

ほかにも「海戦」という遊びでは、帽子のつばを前や横、後ろにかぶってそれぞれ戦艦・駆逐艦・潜水艦として、潜水艦は駆逐艦に、戦艦は潜水艦に、駆逐艦は戦艦に弱いとルールを決めて、村中を走り回ったといいます。

また、夏には学校の帰りに毎日魚取りをしてその場で火をおこして食べたといいます。鳥は「鳥さし」といって、棒に縫い針を付けてとったり、二股に分かれた木の枝を切って、生ゴムを取りつけて「ゴム鉄砲」で石を飛ばしてとったそうです。

魚や鳥だけでなく、近所からスイカを盗むこともあったようです。そのことについて、昔は大人たちも子どものやることだと言って大目に見てくれ、大騒ぎにはならなかったといいます。

女の子の遊び 女の子の遊びは男の子のそれと比べるともう少し平和的だったようです。

J.Mさん(昭和9年生・豊科)は「シロツメクサとアカツメクサを使っておままごとをした。シロツメクサを白いご飯にしたり、アカツメクサを散らしてお寿司のご飯にしたりして遊んだ」といいます。また、お手玉や毬つきの歌は祖母に教えてもらったそうです。「今朝早う起きて池のそば池のみなも(水面)にみな散りし かたわの紅葉も色紅葉 一さまどんどん 二さまどんどん」と

いう歌だったそうです。

大勢でする遊び 男の子も女の子もした遊びでは、陣取り・棒飛ばし・釘さし・ビー玉でする野球・足(石)ガッコ(地面に丸や四角を書いて、その中に石を投げてケンケンをする)・かくれんぼ・警察ごっこ(警察役の子が縄を持って追いかける)・だるまさんがころんだ・メンコ(パッチンなどとも言った)・木登りなどがあります。

また、男の子も女の子も異なる年齢の子ども同士で遊ぶことは当たり前だったといえます。T.Sさん(昭和11年生・豊科)は

「昔は年の違う子が仲間になって遊んだ。年長さんが年下の子の面倒をみてくれたから割合安心だった。夏なんか川原で遊んだけど、大きい子から小さい子まで一緒に遊ぶから事故がなかった。私は夏休みは毎日と言っていいくらい川原に行き遊んだ」といいます。

外で遊ぶ時にはよく地区の同姓で祀っている「同姓のお宮」で遊んだそうです。広場になっていたので、地面に絵を書いたり大勢で遊んだりすることができたといえます。



豊科熊倉S氏同姓のお宮

お正月などには特別な遊びもしました。凧揚げ・羽つき・カルタ・すごろく・花札、トランプ・家族合わせ(かるたの一種でカードで遊ぶもの。家族というまとまりを集めるゲーム)・十六武蔵(盤上で駒を取り合うもの)などがあったといえます。



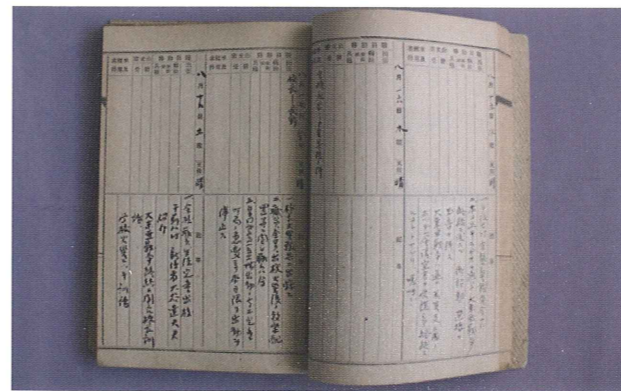
家族合わせ・国旗合わ(安曇野市教育委員会蔵)

## ◆◆終戦後の子どもたち◆◆

玉音放送を聞いた子どもたち 昭和20年8月15日、子どもたちは昭和天皇の玉音放送で終戦を迎えます。

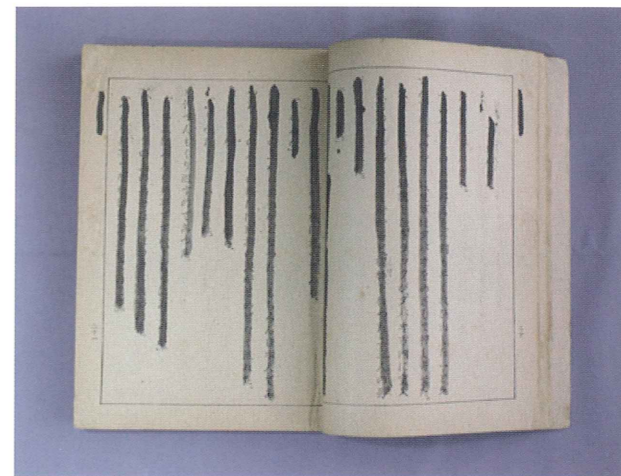
「玉音放送があるってことはどうして知ったのか覚えていない。わからないけれども、陛下の声を聞くななんて考えられることじゃなかった。お盆の最中、ちょうど夏休みだった。8月15日の正午は絶対忘れない。われわれは奉安殿の前を最敬礼しなければ通れない、(天皇というのは)そんな人間だったから。だから学校で習うような「朕思うに…」なんて言葉とは全然違う言葉でしゃべっていることにまずびっくりした。それでも理解の出来る言葉じゃなかったけど、なにせ戦争が終わった事よりも戦争に負けたということの方が大きくてショックだった。終わったんじゃない、負けたんだ。日本の国民はすべて殺されるんじゃないかと思った」T.Yさん(昭和8年生・穂高)

衝撃を受けたのは子どもだけではなくでした。豊科国民青年学校『昭和20年度学校日誌』の8月15日には「本日正午ラジオヲ通ジテ大東亜戦争終結ニ関スル(一字空) 御詔勅 直接ニ玉音ヲ拝ス。大東亜戦争ハ遂ニ米、英、支三國ノポツダム会議宣告ヲ受諾シテ終結スルコトナレリ。嗟呼！」とあり、その衝撃の大きさを伺うことができます。



豊科国民青年学校『昭和20年度学校日誌』(安曇野市立豊科南小学校蔵)

墨塗り教科書 国民学校では昭和20年度の3学期から修身・国史・地理の授業が廃止されます。また、教科書のなかでも軍事色の強い部分は墨で塗ったり、切り取ったり、糊で貼り合わせて消さなければなりません。



墨塗り教科書(当館蔵)

「教科書は真黒になった。自分で消す。先生に言われて自分で消した。最後は先生が消した部分もずいぶんあった」T.Yさん(昭和8年生・穂高)

『穂高町の十五年戦争・町民がつづる戦争体験集』(穂高町戦争体験を語りつぐ会発行 1987)には「(前略)「お国のために、鬼畜米英をやっつけるために、強い兵隊になるために大事な大事な教科書」と教えた同じ教師が、今その教科書を「切り取れ、貼り合わせろ、塗りつぶせ」と命じているのです。子ども心に教師に対し不信感が芽生えるのは当然ですが、「戦争に負けた。世の中は変わった。何でも今までと反対のことをするのが正しいのだ」と周りの大人たちが言い、私たちもそれに慣らされていきました。(後略)」とあります。

子どもたちは子どもたちなりに「終戦」を受け止め、苦しみながら民主主義を受け入れていったのかもしれない。

ナトコ映画 GHQ(連合軍総司令部)による民主化教育の一環として、全国にアメリカ製「ナトコ16ミリ発声映写機」が、世界の風俗や民主化を促す内容のフィルムとともに無償貸与されました。CIE教育映画、通称「ナトコ映画」とよばれるこの映画は学校や、公民館、駅などで上映されました。豊科熊倉でこの「ナトコ映画」を見たK.Mさん(昭和2年生・豊科)は「大勢の方が見に来て、スクリーンの表からだけではなく、裏側からも見た。100~150人くらいのその地区の人たちが見に来て」といいます。外で上映するため夜しか出来なかったそうです。また、E.Mさん(昭和5年生・豊科)は戦後の映画について

「芸能に飢えていたから、私たちは聞いたことしかないような外国の映画が見られるから、戦後

はよく映画館に行った。結構楽しかった」と、社会の変化を素直に楽しんでいるたくましい子どもの姿を伺わせてくれました。

## コラム④ 学校登山・修学旅行

登山は「皇国民」としての鍛錬のため戦中も盛んに行われました。登山についての思い出が『穂高小学校歌碑建設記念誌 穂高学校のあゆみ』にあります。「(前略)夏の登山は中房 - 燕岳(小五)常念 - 燕縦走(小六) - 大瀧山 - 上高地(高一)常念 - 槍ヶ岳(高二)で、米味噌など背負い、ゴザに油紙を張った雨具を持って、運動靴やワラジばきで学校から歩いたので大変苦しかった。その代り山岳の雄大さと高嶺の花の美しさを知った。(後略)」



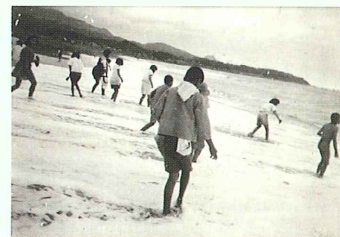
着ゴザとゲートルの子どもたち 穂高尋常小学校  
昭和5年(個人蔵)

また、修学旅行は日清戦争後、養蚕による好景気や鉄道の開通と相まって始まりました。大正3年(1914)には、豊科尋常小学校が長野・直江津方面に行っています。

昭和24年(1949)、高家小学校六年生の文集には修学旅行で長野・直江津へ行き、初めて海を見た感動が綴られています。「(前略)海へ出る朝は、とても良い天気で、おどる足をいっそううきうきとさせた。長い村道をあっちこちに、一むれになって父兄に送られながら歩く私達の足どりは、大きな喜びや希望を胸にたたえながら駅にむかっていった。(中略)」

私達はいよいよ目的の柏崎にむかった。漁村を眺めつつ汽車はどんどん進む。

「あっ海。」みんなは同時に叫んだ。汽車から首を出して広い広い青い青いはてしのない海を見た。私は夢心地であった。みんなこちら側へきて、汽車がころぶかも知れないとさえ思った(後略)」



高家小学校 直江津市への修学旅行  
昭和24年7月(個人蔵)

## ◆◆おわりに◆◆

昭和初めから太平洋戦争の敗戦まで続いた軍国主義教育は、国家を最上とし、子どもたちの個を否定するものでした。しかし、戦時下を生きた子どもたちは厳しい社会体制の下でたくましく学び、遊び、暮らしました。また、自然豊かな安曇野の昭和の子どもたちは自然の中で遊び、遊びの中で学び得ることも少なくなかったのではないのでしょうか。

昭和という時代は長い歴史の中で、私たちの暮らしが大きく様変わりした時代でもあります。表紙の写真の子どもたちが思い描いた未来を、私たちは築くことができましたでしょうか。

いま一度私たちは昭和という時代を振り返り、子どもたちの未来について考えてみる必要があるかもしれません。



梅がほころぶ校舎の前で鶏番番の子どもと写す  
高家小学校 昭和25年春(個人蔵)

編集 安曇野市豊科郷土博物館  
発行 財団法人豊科文化財団  
安曇野市豊科郷土博物館  
〒399-8205 長野県安曇野市豊科 4289-8  
TEL・FAX 0263-72-5672  
URL : <http://toyohaku.jugem.jp/>